



やっとでしたね。本当は10万円で売っても元は取れませんが、誰かに買ってもらうことに意味があると思ったので3万円という価格で店に出しました。

プロジェクトの発表イベントでは、綿を育てている風景や製作過程の写真を展示しました。ただあの時気を付けていたのは、あまり説教臭いものにならないこと。環境意識の有無に関わらず、純粹に洋服が好きな人の関心を引かなければ意味がないと思っただけです。だから「[DESPIRADO]」という渋谷のセレクトショップでイベントを行い、イメージビジュアルも都会的な雰囲気で作りました。あくまでファッションの一环として興味を持ってもらい、その上で服ができるまでの経緯を知ってもらいたいという思いがありました。

——服を作るためには、それだけの労力が必要になるのですね。私たちがそうした経緯を知るだけでも、服への接し方は変わるのではないかと思います。

河村..そうですね。一つひとつの服の重みを理解してもらえれば良いと思います。服の製作背景が分かれば、簡単に捨てる気にはなりませんよね。ただ、最近は服を循環させようという意識が強くなってきているようにみえます。着なくなった服を捨てるのではなく、ブランド古着店に持って行ったり、フリマアプリに出品したりする人も多くなってきました。そういうシステムが充実してきたことを考えると、良い時代になったなと思います。

こうした流れのなかで、僕らも多くのブランドやショップが抱えている在庫を回収

し、リメイクするというプロジェクトをやるのかと考えています。今はこのブランドやショップも売れ残った洋服の処理に困っている状態です。そうした洋服をリメイクし、新しい形で販売するイベントを開いたら面白いのではないかと思います。

服を着ること、作ること

——ファストファッションの台頭によって、誰もが気軽にファッションを楽しめるようになった一方で、環境問題や低賃金労働といった多くの社会問題が浮き彫りになっています。そうした現代のファッション業界に対して思うことはありますか。

井村..ファストファッションに対して「なんだかなあ」という気持ちはずっとありました。しかしそれ以上に、自分たちの作り

方には意味があるんだという感じを感じています。私たちは一つひとつ違うものを作っているの、「こういうもの作ったな」って結構覚えてるんですよ。それだけ自分たちの作る服に愛着があります。製作工程は大変ですが、そうやって作ったものが誰かの手に渡っていると思うと、私たちのやり方には価値があるのだと感じられますね。

河村..ファッションの流れは非常に速いので、新しい服がどんどん生産されるのは仕方がないことだと思います。僕らにできることは、そうして増えた服をリメイクすることくらいです。流動的なファッションの在り方を批判するのではなく、ファッション業界という一つの枠組みのなかでどう共存していくかを考えることが大事だと思います。

